

第三回「若手アルタイ学、中央アジア研究者集会」

岡田英弘

正式の名称は未だにないが、一般には「野尻湖クリルタイ」としてかなり知られ始めたこの会も今年はいよいよ第三回を迎え、例に依つて長野県上水内郡信濃町の野尻湖ホテルに於いて七月十日(日)から十四日(木)まで、四泊五日の日程で行われた。第一回の出席者は三十三名、第二回には三十八名が参加したのであるが、今回は予想を遥かに上廻る次の五十名の出席を見、空前の盛況を呈した。(ABC順)

阿南惟敬、青木富太郎、陳安恩、陳捷先、崔鶴根、江上波夫、江嶋寿雄、榎本方雄、江実、後藤富男、萩原淳平、羽田亨一、石橋秀雄、Jagchid Secin、神田信夫、河内良弘、小玉大円、小山皓一郎、李学智、林恩顕、間野英二、松本幹男、松村潤、三橋富治男、三上次男、護雅夫、村上正二、村瀬勝彦、長沢和俊、中根千枝、小田寿典、岡田英弘、岡本敬二、岡崎精郎、長田夏樹、大沢陽典、佐口透、沢田勲、島田正郎、嶋崎昌、志茂碩敏、

高柳等、田山茂、徳永康元、植村清二、若松寛、家島彦一、山田信夫、山口瑞鳳、梁玩詰。

但しこの会の中心人物でありオーガナイザーである山田信夫は、第一日早々大阪大学文学部長守屋美都雄氏急逝の報に、岡崎精郎と共に急遽帰阪し、また羽田亨一は祖母君に当る故羽田亨博士未亡人の逝去に遭つて西帰、結局実際にこの集会に参加したのは四十七人に止つた。就中この回の集りの特色をなしたのは、第一回の時に出席されて面識の多い韓国の崔鶴根氏をはじめ、中華民国の Jagchid Secin、李学智、陳捷先の諸氏が、この会の直前に開かれた国際会議のため来日、その足で参加された事であつたが、かかる国際色と共に十数名に上る学生諸君の参加も「若手」を標榜するこの会にとつて好ましい現象であつた。

実際のプログラムは十一日(月)に始まり、先ず恒例の Confessions が行われた(9:30-12:30)。ここで語られた研究の近況や計画の中から目ぼしいものを拾つて紹介すれば、神田・松村・岡田は「八旗通志列伝索引」の出版を完成、昨年来阿南・岡本と共に輪読中であつた「明代滿蒙史料 李朝実録抄」に代えて新たに「康熙本清太宗実録」の校訂を開始、また、また神田は「百二十老人語録」を講読中である。護は Philologiae Turcicae Fundamenta 第三巻に突厥の事を書き、本年三月から五月まで東京大学との交換教授協定

によつてレニングラード大学東洋学部及びアジア諸民族研究所レニングラード支所に滞在、且つ中央アジアを旅行したと、また現在日本・トルコ會話書を準備中であることを明かにした。田山は遊牧民の戦争目的の特殊性と、蒙古現代史が案外不明の点が多いことを一九一一年の外蒙第一次革命の日附を例にとつて説明した。中根はチベットの政治構造・社会構造の相關關係の調査、いわゆる *structural analysis* について述べ、更に一九六八年に日本で開催が予定されている國際人類学・民族学会大会に *Eurasian nomadism* に関する *symposium* を設ける希望で、このためにこの集りの出席者一同の協力を要請した。青木は清代蒙古の相統制の研究と関連して一八九〇年代のハルハのお家騒動の史料を紹介した。崔は滿文遼史の翻訳を進めている。若松は「外藩蒙古回部王公表伝」の青海額魯特部總伝の論説を準備中であること、数十年來京都大学で進行中であつた「五体清文鑑」の滿洲字音写のローマナイズがいよいよ刊行の段階に入つたことを報告した。河内は滿洲・東蒙古史研究文献目録を作成中である。山口はダライ・ラマ政権の成立史、古代チベット史の *chronology* の立て直し、玄奘と十六羅漢との關係について研究を進めている。嶋崎は高昌国の民族構成について疑問を提出、車師前王国との關係からこれを姑師族と仮称、恐らくアルタイ系であろうと説いた。長田は日本語と朝鮮語の単音

節名詞の比較の結果について報告した。江は五体清文鑑の一八九七五項目について滿・蒙・回のうち語源上關係がありそうなものを摘出した結果をアルタイ語族説の資料とすべきことを説き、また同書の成立年代について一説を提出した。江上はイランの古代騎馬民族ののこしたいわゆる *pre-Scythic cultures* に関する調査の概要と、綏遠式銅器の年代が新しいものでは西晋末まで降ることを報告して感銘を与えた。

午後(3:00-5:30)は「外国における研究と資料」と題して江上・徳永・護三人の新帰国者の報告と、Jagchid・崔のそれぞれの国における事情の紹介があつた。江上の報告は「古代イランにおける騎馬民族とその文化」についてであつて、前六世紀のスキタイ・前四世紀の匈奴と東西に遠く隔つた二民族に共通の文化が認められ、これはそれ以前に存在した騎馬民族の文化が波及した結果であるとし、これら *pre-Scythic cultures* の例として既に知られつゝ *Caucasus* の *Koban* 河流域のもの、イラン西北部の *Taliche* のもの、南イランの *Zagros* 山中の *Luristan* のもの、*Sakriz* 近くの *Zivieh* のもの、*Stalk* のものについて一々詳説し、これらすべて山中の戰術的要所を占める遺跡で高い水準の文化を示すことを述べ、最後に一九五九年ごろからテヘランの骨董屋に多く出た *Amrash* 物と称せられる遺品群の源流を尋ねてエルブルス山中の *Amrash* から馬で二日程の高原上の

Dalaman 附近に累々たる古墳群を発見した調査行の成果を伝え、これが前一千年頃のもので青銅器を主体とすることを述べて報告を結んだ。

次に徳永は「ハンガリーのアルタイ学」について話し、有名なトルコ語文法の著者 Németh がまだ健在であること、現役のトルコ学者には Fekete 蒙古学者にはアカテミー副総裁の Ligeti Rinchen の女婿の Kara があること、出版物には Acta Orientalia・Acta Linguistica・Acta Ethnographica があることを伝え、他に Róna-Tás・Kóhalmi・シヤムニズムの研究者 Dicszezi 等の名を挙げた。

護は「レニングラードのアルタイ学」と題し、今回の滞在中に面会した学者のリストを提出して簡単に説明を加えた。

夜(8:00~10:00)はスライド映写に当てられ、三上はイラン・サマルカンド旅行、徳永はハンガリー・フィンランド旅行、長沢はシルク・ロードの旅の写真を示して説明する所があつた。

十二日(火)は、この会の趣旨、並びに今回のテーマ「アルタイ学研究の新課題」に沿つて若手アルタイ学徒の研究発表を聞き、これに対して質疑が行われた。先ず間野「モダナーリスターンの遊牧系諸集団」は、「Tarikh-i-Rashidi と Zafar Nama に出る二三の集団名につき」、秘史及び集史の記載と対比しつつその性格と東チャガタイ・ハン国の構造とを

分析、代々ハンの推戴権を有する ulus-begi を出す Dughlat を除きその他の tuman (万戸) 集団は左右翼に分れ、各万戸は qushun (千戸) に分れたこと、amir を出す集団と sar を長とする集団との別があつたこと、他に Barlas・Jarlas より出て世襲の ata-begi (未成年のハン又はハン位を継承すべき者の後見役)・sari-dafar (課税台帳の管理者)・tura (慣習法) の管理者などの官職のあつたことを明かにした。これに対し父系血縁集団と徴税官の存在との関係、慣習と慣習法との差異、部族名の系統などについて質問が出たが、間野が指摘した秘史四七節の Način Baratur の子 Doqoladai が Dughlat 家の名祖であろうとの事実は興味を呼んだ。

若松「カルムックにおけるラマ教受容の歴史的側面」は、ロシア・蒙古の史料を利用して、カルムックの改宗が一六一五年頃のことであり、それは宗主ジャサクト・ハンの圧力に由来するものであつたこと、チャガン・ノムン・ハンの訪問を受けて出家を決意したホシュートのパイバガスを大台吉たちが翻意せしめ、その代りにザヤ・パンディタを含む諸子を出家せしめたのはジュン・ガルのハラ・フラの権力強化を恐れたためであつたことなどを考証した。質疑の中で山口は紅教・黄教の二大別が清朝に始まる誤用であつて、紅教又は紅帽派の称は実は Karma pa の一派 Zhwa dmar pa のみを指し、これが極めて強大であつた為にゲデンパ以外には紅

帽派のみが存在するように誤認されたものであることを指摘した。

河内「明代女真における族長権の測定」は、明代女真に与えられた官職に都督・都指揮・指揮の三グループがあり、グループを越えて陞任することがなく、都督に任ぜられるものは族長でその地位は世襲であつたと規定し、その権限の主要なものが奏保権であつたとし、明末に至つて指揮階級にも実力において都督・都指揮を凌ぐものが出、成化二十五年には一階級陞職が公認され、弘治六年以後旧来の家柄でなくとも新たに都督に任ぜられる者が出たことを説いた。これに対して奏保権と世襲制との間の矛盾、族の定義などについて質問が続出した。

小田「ウイグル文トルコ語天地八陽神呪経の写本について」は同経の写本・版本十種及びベルリン・コレクシヨンの多数の断片を対校し、ロンドン本(L)が最古で八・九世紀、次が大谷本(T₁・T₂)、他のペテルブルグ本・北京本・ベルリン本等はもつと年代が降るものと見、最初はマニ教の經典として訳され後に漢文本に即して修正されたかとの推測を表明した。この最後の部分については大分異論もあつた。

夜は江上のエルブス調査、護のレニングラード・中央アジア旅行のスライド、及び出席はされなかつたがフィルムを送られた羽田明氏の南欧・西アジア旅行のハミリ映写があつ

た。

十三日(水)午前は前日に引続いて研究発表があり、小山「集史に現われたオグズ伝説」はラシードの第一巻第一編第一章の全訳に基いて、この最古の Oghuz Khan 伝説の全貌を分析、七段に分けて説明を加え、その著しいイسلام色を指摘、一方同様の説話を録する Oghuz Name にはかかる着色が見られないことを説き、これがイル・ハン国のイスマム化と関係があらうと推測した。

家島は「イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガル旅行記」の翻訳の完成を機に、九二一—九二二年カリフに遣わされてブルガル王に使したこの人の報告書の内容を詳細に紹介、バグダードからサーマーン朝の都バハラ、ジェルジャニヤ、Ghuzz 族の任地を経て Tih 河上のブルガル王の帳幕に到る道程と、当時のブルガルが部族連合国家で、王庭から僅か一日程の Suwar が一派に分れ、Wayrah は王子を君侯に迎え、Aksal は王の対ハザル独立運動への協力を拒む実情であり、ブルガールの君侯たちはかなり王権から自由であつたこと、粟と馬肉を主食とし、各戸は毎年王に黒貂の皮を貢したことなどを説明した。

午後は例年の如く excursion で、今年には戸隠宝光社が目地的に選ばれた。

夕食後残つた二〇名によつて総括討論が行われ、今年の成

果の評価や来年のプログラムの希望などが議題に上つたが、結局は今年的方式で不可なしとする意見が多かつた。但し参加人員の増加はこの会の隆盛を示して慶すべきではあるが、他方会の性格を變質せしめその運営を困難にする危険をも含むことが指摘され、何らかの方法で過度の膨脹を防ぐ必要が説かれたが、何ら結論は出なかつた。かくて翌十四日(木)朝食後正式に散会したのである。

中国の歴史博物館 (二)

菊池 英夫

二 中国歴史博物館の組織と陳列工作

北京の天安門広場に人民大会堂と向かい合つている壮大な建物が、中国歴史博物館と中国革命博物館である。正面の出入口は一五〇人以上の人間が一行横隊で通れるという石段で、石段を昇り切ると立ち列ぶ巨大な石柱の柱廊である。その中央、頭上四〇米の高さから、金色に輝く星が參觀者を見下している。柱廊を抜けて前庭を過ぎもう一度石段を昇ると、大理石を畳んだロビーに入る。その向つて左手(北側)が革命博物館で、右手(南側)が歴史博物館である。両博物

館はそれぞれロノ字型をなして内部は全く別であり、大きな玄関だけを共有しているわけである。中国歴史博物館は、一九五八年一〇月に建設を開始し、一九五九年建国九周年を記念して予備展覧を開始し、一九六一年七月一日、中国共産党創立四〇周年記念日に正式に開館した。即ちこの建物自身、いわゆる大躍進の産物である。クリム色、淡緑、淡青色の壁面、大きな明るい窓、七米という高い天井は純白、床はリノリューム張りで、防湿、防塵、吸音、保温、通風にも一応の設備を備え、数ヶ所の休憩室・貴賓室もある。この博物館は、五〇万年前の「原始群居時期」にはじまり一八四〇年アヘン戦争に終る中国の通史を、原始社会、奴隸社会、封建社会、の三館に分ち陳列している。総陳列面積は八〇〇〇余平方米、一周約三軒、常時陳列九〇〇〇余点、しかも考古資料については殆んどすべてを解放後の科学的発掘品によつて構成している点が特色である。

歴史博物館の機構はごく大体のことしか聞けなかつたが、保管部、陳列部、講解部、群衆宣伝部、服務部、に分かれている。保管部の任務については多言を要しまい。陳列部の陳列法については後述の如く学校の教科書との連繋がはかられ、中学校などの正課の歴史の授業が、ちゃんと日程を組んで博物館内で行われているのはうらやましい限りであつた。定期的な陳列変えばかりでなく、新出資料を採り入れたら、